

## 二〇二五年度入学式 学長式辞

新入生のみなさん、成蹊大学、成蹊大学大学院へのご入学おめでとうございます。御父母、保証人の皆様もお慶びのことと存じます。心よりお祝い申し上げます。

一九二四年に成蹊学園は池袋からこの吉祥寺に校地を移し、今年で百一年目となります。この百年余の間にはいろいろな出来事がありました。成蹊のシンボルである本館を建設中には関東大震災がありました。幸いなことに堅固に創られていたこの建物はびくともしませんでした。移転の翌年には成蹊大学のルーツとなる旧制の成蹊高等学校が誕生しております。こちらは今年で開校百年となり、現在学園史料館でそれを記念した展示が行われています。旧制成蹊高等学校はその後の日本を支える多くの人物を輩出しましたが、やがて第二次世界大戦を迎え大きな危機に直面しました。体操場であったトラスコンガーデンが学校工場となり軍用のトランシーバー作りに従事させられた、終戦を迎え虚無感、虚脱感におそわれた、そして一九四五年八月一日を境に価値観がまったく異なる学生生活が始まったと当時の学生の方が手記で述べられています。旧制成蹊高等学校は一九五〇年に閉校となり、そのリソースは新制の成蹊高等学校と成蹊大学に受け継がれました。大学は政治経済学部の一学部で発足し、その後、工学部、文学部を加え改組を経て、現在の五学部、四研究科の体制となっております。一九六〇年代後半からの学園紛争の中で教職員と学生の関係が難しかった時代もありますが、やがて往時の親密さを取り戻しました。一九八〇年代に本学で学生生活を送られた歌人の林あまきさんは、このキャンパスで俳優の片桐はいりさんと親しい友人となり、演劇活動で忙しかった片桐さんの卒業論文の提出が期限ぎりぎりになってしまいそれを助けたところ、指導教授の先生が心配そうに事務室の前で待っていらしたというのを懐かしく語っていらっしやいました。林あまき先生は現在本学で短歌と文章作成の授業を担当なさっており、みなさんが直にお話になる機会もあるかと思えます。二一世紀になってからも、本学は東日本大震災やコロナ禍を乗り越えて今日に至っております。このような百年の歩みをこのキャンパスは見つめており、みなさんは新たな百年の歩みに加わることとなります。みなさんのご入学を寿ぎ、一編の詩を贈りたいと思います。

家に年寄りがいるのはいいことだ  
あかんぼがいるのと同じくらいいいことだ

ふたつは似ても似つかないことのように  
実は一本のあざなえる縄の両端のようにそっくり

始まりがあって終わりが  
始まりもなく終わりのないものが見えてくる

その繩を輪っかにつなげて

そこからさかしらに人生をのぞくのはやめておこう

百年の長さもつ繩の

よじれねじれささくれくされ

神様ではないのだから

僕らはロバのように繩を噛む

甘い恋

しょっぱい子育て

苦い戦争

酸っぱい革命

人生をたらふく食ったあなたの顔は

優しさと厳しさとあきらめとしたたかさがまじり合い

しわの間にあかんぼの輝く無垢も

透けてみえる

もういいかい

もういいよ

けれどあなたは目をつむったまま

木のうしろに隠れて月日を数えていたわけじゃない

百年のその一日一日をいろどったのは

青空と米と野菜といさかいと歌のとりどりの色

怒るがいい泣くがいい

叫ぶがいい黙りこむがいい

ひとりのあなたの魂の底にひそむものは

世界中のどんな大事件より巨大だ

だが今あなたの顔に浮かぶのは  
残り少ない未来にむかう静かな微笑み

それはあなたの今日をぼくらの明日に生かすための  
ただ一つの贈り物

限りない宇宙の闇へと燃えあがる  
美しい夕焼け

百年の長さを持つ縄のなかには「よじれねじれささくれくされ」と詩人が描写したように辛いこと悲しいことも多く含まれています。また、「青空と米と野菜といさかいと歌」がいろどったと描かれているように希望と生活と齟齬とやすらぎも百年の営みのなかには含まれておりましょう。この詩で述べられている「あなた」は、私も含めこのキャンパスで様々な時を過ごした多くの学生と教職員であり、キャンパスの先輩から次の百年を歩まれるみなさんに「美しい夕焼け」で喻えられるような歓迎と祝福の想いを贈りたいと思います。みなさんが、この成蹊大学という場で多くのことを経験され、それが豊かで実りあるものになることを心から願っています。みなさんお一人お一人がよく学ばれ、成長されることを期待し、お祝いの言葉を結びます。

二〇二五年四月三日

成蹊大学長 森 雄一